

京 都 帝 國 大 學 經 濟 學 部 內 東 亞 經 濟 研 究 所

年 四 回 (二 月 五 月 九 月 十 二 月) 發 行

東 亞 經 濟 論 叢

第 四 卷 第 一 號

昭 和 十 九 年 十 二 月

支那インフレーションと其の對策……………谷口吉彦

唐の天寶時代に於ける河西道邊防軍の衣糧給與に就きて……………那波利貞

近世初期に於ける東亞貿易……………金田近二

支那奧地産鹽技術の技術史的地位……………島 恭 彦

支那貨幣小史……………穗積文雄

孫文の民生主義……………出口勇藏

(裝 轉 載)

書 肆 有 斐 閣 發 賣

近世初期に於ける東亞貿易

金 田 近 二

一 はしがき——「東洋及東洋史の發見」

滿洲事變以來我國に起つた二つの大きな思潮に日本主義及び東洋主義の勃興がある。その前者に就ては説明する迄もないが、茲に所謂東洋主義とは、西洋の凡ゆる束縛や支配から解放された自主的な東洋の立場に立つて東洋を見、而も東洋全體を一の運命共同體として一體的に考へて行かうとする主義並にそれに基づく行動の體系を意味する。

併しこの兩者は見方によつては二にして實は一とも言へる。即ち東洋主義は日本主義の延長であり、日本主義を前提としての東洋主義であると考へられる。唯兩者はその思潮として、又はその思潮に基づく行動としての重點乃至色彩を多少異にしてゐる。即ち日本主義の方は一般的文化運動として極めて廣い意味をもつてゐるが、東洋主義の方はどちらかと言へば政治的な色彩が強い。東洋主義の一表現としての大アジア主義の如きに於て殊に然りである。之は東洋主義が未だ若いからであつて、纏てはそれも政治的な面だけに限らず廣く一般的な文化運

動へと發展し行くことであらう。

何れにせよ、この日本主義と東洋主義との兩者が相伴つて國民的な一大思潮乃至行動として現はれて來たといふことは、我國文化史上洵に未曾有のことと言つてよからうと思ふ。我國文化史の特徴は、幾度かの外國文化の輸入——従つて之に對する一時的深醉感溺——と、幾度かの日本主義の復興とが相交代してゐる所にあり、従つて滿洲事變以來日本主義が勃興したとて別に珍しいことではないが、併し之に東洋主義が伴つたことは蓋し今回を以て嚆矢とする。之全く明治以來の日本の對外的發展が一新段階に到達した故に外ならず、その點を特に強調する意味に於て、我々は滿洲事變以來始めて「東洋を發見した」と言つてもよからうと思ふ。

今や大東亞戰爭の戰果により、南洋をも含めての所謂大東亞共榮圈の基礎は確立し、曠て印度とも全く新なる意味に於て密接な交渉を持たねばならぬ形勢となつて來た。愈々以て我々は新なる觀點から東洋を見直さねばならぬ時が來たのである。「東洋發見」の意義は洵に重大なりと言はねばならぬ。(註)

(註) 以上は既に拙著「南洋及印度經濟研究」(昭和十七年)の序文に於て述べた所である。その中で筆者の所謂東洋主義が滿洲事變以來始めて起つたといふ見方に對しては恐らく異論も少くないであらうと思ふ。筆者と雖も東洋主義の萌芽が既に夙く明治時代の先覺者の思想の中にあつたことを否定するものではない。然し乍らそれは矢張り萌芽であつて、滔々たる國民的思潮乃至國民運動といひ得る段階には到達してゐなかつた。そして左様な段階に到達したのは滿洲事變以後であるといふのが筆者の見解なのである。誤解なきことを望む。

扱て斯様な「東洋發見」の時代となつた以上、新なる「東洋史の發見」がなされねばならぬことも亦當然である。從來我國に於て發達し來つた東洋史學は、——少しく極言するならば——實は支那史學であり、或は支那的史

觀、乃至西洋的史觀に——必ずしも意識的ではなかつたらうが——立脚した東洋史學であつたと言つても過言ではなかつた。斯様な傾向に對する反省は固より一部東洋史學者の間に起りつゝあつたが、然し他面一つのまとまつた歴史としての東洋史の成立の根據に對する疑惑が長く學界を支配し來つた爲に、正しい意味での「東洋史の發見」は容易になされなかつたのである。その疑惑と言ふのは、要するに過去の東洋諸地域が西洋のやうに文化的統一をもつた一の歴史的世界に結合されてゐなかつたといふ、餘りにも歴史主義的乃至は文化史的な見地に基づいてゐたのである。

然し乍ら歴史は飽く迄歴史的現實の統一的發展に外ならず、従つて歴史的認識は常に現代に即して而も主體的に構成さるべきであるといふ考へ方が正しいとするならば、——そして筆者は正にこの見地をとるものであるが——今や一の歴史的世界としての東洋の存在が、而も東洋史は愚か、世界史の最も有力な創造者たる地位に立てる我々日本人によつて明確に認識把握された以上、上述の如き東洋史成立の可能性に對する疑惑の殘存する餘地は無いものと言はねばならぬ。

果して然らば新に書直さるべき東洋史は如何なる性格を具備し、如何なる體系にまとめらるべきであるか。之こそ今や我が東洋史學に課せられた最大の課題であり、之が解決の爲に斯界の學者の總動員が要請せられつゝある所以である。筆者は固より斯學の專攻者に非ず、従つてこの點に關しては偏に専門學者の教へを待つものであるが、筆者の今日の研究上の必要は専門學者による新しき東洋史體系の完成——それは恐らく一朝一夕に期待し得べきものではあるまい——を待つてゐる餘裕はない。乃で筆者は筆者なりに一應の見透しをつけ、それに基づ

いて研究を進めつゝある次第である。

筆者の現に意圖しつゝある所は、新に「發見されたる東洋」を改めて科學的に認識する爲の重要な一方法としての歴史的研究、就中主として政治經濟史的研究である。加ふるに筆者の主として關心の對象となりつゝある部分は近代東洋である。従つて目下の筆者にとつて何よりも必要なことは近代東洋の政治經濟史的特質の把握である。之に就ての筆者の見透しを詳述することは別の機會に譲る外はないが、一言以て之を蔽へば、それは偶々近代化に於て一步前進せる西洋が、それに遅れたる東洋を植民地化、若しくは半植民地化せる過程であり、同時にこの過程の中より東洋の自覺が起り、自主性が成長し、遂には筆者の所謂「東洋の發見」に至る歴史的過程であると言ふことが出来ると思ふ。之に名付けて筆者は「近世東亞政治經濟史」といふ。敢て「東洋」の文字を避けんとするは、飽く迄日本の、そして東洋の自主的立場に立つて改めて東洋を見直さんとする、所謂東洋主義に立脚する所以を、假令一字の相違の上になりと表して置き度い微衷に外ならない。

本稿は正にこの近世東亞政治經濟史の序説の一部に相當するが、それも研究の未熟の爲に漸く素描を試みた程度のものに終つたのみならず、歴史的敘述と云ふよりは寧ろ史論の體に墮したことを遺憾に思つてゐる。然し敘述の中に多少共新しき東洋史の見地を表明し得たとすれば、目下の筆者としては望外の喜びとする所である。

二 西洋人來航前に於ける東亞及東亞貿易概觀

西洋人の東亞來航の先驅をなせるは言ふ迄もなく葡國人バスコ・ダ・ガマであり、彼がアフリカの南端を廻つて

改めて印度のカリカットに到達したのが西紀一四九八年であるから、西洋人來航の直前と言へば、大體西紀十五世紀の後半頃といふことになる。その頃の東亞の一般情勢を概観すれば、先づ日本は人皇百二代、後花園天皇より百三代、後土御門天皇に至る時代、即ち足利將軍八代義隆より十一代義隆に至る時代に當り、應仁の亂（西紀一四六七年乃至七七年）より引續き戰國の世に移りつゝあつた頃である。

支那にあつては明の英宗（六代並に八代）より孝宗（十代）に至る時代に當り、未だ明の盛世時代と言ふべく、殊に孝宗は明の中世に於ける賢者として聞え、その治世は弘治の世として史上に喧傳せられてゐるが、次の武宗時代より宦官の弊現はれ、明國も漸く衰運に向ふのである。

印度にあつては、デカン半島の南端に唯一のヒンヅー王國として二百年の盛世を誇れるヴィジャヤナガル王國の尙餘命を保てるを除き、全印度は事實上多數の回教王國に分れ、群雄割據の狀勢を呈して常に戰亂の絶えることなく、デリーには一四五〇年よりアフガン人のロヂー王朝君臨せるも天下に號令する丈の勢威なく、之亦地方的回教政權の一たるに過ぎざる状態であつた。斯くて十六世紀の半頃（一五五六年）アクバール大帝によるムガル帝國の確立を見るまでは印度に統一と秩序は齎らされなかつた。

翻つて印度支那半島方面の情勢はと見れば、東海岸に一四二七年明國の羈絆より脱して獨立した黎王朝の安南國（當時は大越國と號した）あり、その南インドネシヤ系種族によつて創られた占城チャムなる小王國を壓迫して一四七〇年逐に之を併合し、クメール族のカンボヂヤ王國と境を接するに至つた。その西隣即ち今日の泰國地域には、同國中世史に四百年以上の命脈を保持したアユチャ王朝があり、メナム河下流一帯を領してその勢力は馬來半島

に及び、北部のチェンマイを中心とする前王朝（スコタイ王朝）の残存勢力や、カムボヂヤ王國等との間に絶えず衝突を繰返してゐた。又今日のビルマ地方には北部にシヤン族のアバ王朝あり、南部のペグー王朝と對立して覇を争ひ、結局十六世紀に入りトウンゲー王朝の勃興を見る迄この地域の統一は見られなかつた。

馬來半島の南部に於ては當時既に回教化してゐたマラツカ王國の存在が特に目立つてゐた。即ち同地は印度洋と南支那海とを結ぶ海上交通の要衝に當る所から、南方貿易の最大の中心地として榮えてゐたのみならず、十六世紀の初頃同地へ來航した西洋人により實に世界第一の貿易港として記録された程であつた。（この點については尙後述する）

最後に當時に於ける南方島嶼部分を一瞥すれば、ジャワにはインドネシヤ民族史上に最も輝しき名を止め、一時は東印度諸島を略々統一するに至つたヒンヅー教王國としてのマジョパイト王國の尙存するあり、但し茲に問題としつゝある時期は同王國の末期に當り、回教浸透の影響を受けて國礎漸く動搖せんとしつゝあつた時代である。更に比律賓諸島にあつては當時未だ極めて未開の状態にあり、即ち東印度や南支那方面からの移住者によつて創られた「バランガイ」（土語にて舟を意味す）と稱する小部落が、沿岸或は奥地平野の各地に雜然と存在したのみで、國家と稱し得る程の組織は未だ何處にも發達して居らなかつたやうである。

之を要するに當時の東亞は、日本、支那、印度の如き古き文化國と雖も未だ中世紀的、乃至封建的時代に屬し、従つて經濟的には總體に自足的農業經濟の支配下にあつたこと言ふ迄もない。それにも拘らず之等各國各地域の間は勿論、遠く西洋との間にも、當時の交通状態としては可成活潑な貿易が行はれてゐた。西洋人來航前の

ことであるから固よりそれは東洋人自身の手によつて營まれてゐたものであるが、それが西洋人の來航後如何なる影響を受くるに至つたかを明にする爲に、以下先づ西洋人來航前の東亞貿易に就て若干の考察を試みることにする。

(一) 東亞貿易の人的要素

當時の東亞貿易は主として何人の手によつて行はれたかといふに、文獻的に見て最も顯著な役割を演じてゐた者はアラビヤ人である。殊に南洋各地域より印度洋並に紅海やベルシャ灣にかけての遠洋貿易は殆ど彼等の獨占する所と言つていゝ状態であつたらしい。この場合文獻上の所謂アラビヤ人なる者が、事實果して今日の地理學上で了解されてゐるアラビヤ地方の出身者のみであつたかどうかは疑問である。當時の、殊に亞細亞に關する地理上の呼稱は極めて莫然たるものが多かつたのであるから、當時のアラビヤ人なる呼稱に對しても餘程餘裕のある解釋を下す必要があり、場合によつては回教徒の異名位に解してもよいのではないかと思ふ。それは兎も角として、眞實アラビヤ商人が活躍してゐたことは疑ふ餘地はない。印度洋方面程ではないが、その一部は支那沿岸諸港、殊に廣東や泉州等に多數進出して來てゐたことは桑原隲藏博士等の研究によつて明にされてゐる。然らばアラビヤ人をして斯の如く東亞貿易に雄飛せしめた理由が那邊にあつたかと考へて見るに、彼等が所謂「沙漠の子」であつて、天惠の菲薄は勢ひ彼等を驅つて海外に赴かしめねば已まなかつたこと、彼等の宗教たる回教の世界性並に積極性が之を鼓舞したこと、而してアラビヤの地が古來東西貿易の要衝を占め、従つて彼等は夙に仲繼商人として性格づけられてゐたこと、等を擧げて之を説明することが出來よう。唯その際問題となることは、あ

のアラビヤ地方から良質の船材が得られたかどうかは頗る疑問であり、従つて造船の問題を彼等は如何にして解決してゐたかといふことである。この點はアラビヤ史の研究者から教へを乞ひ度い所である。

アラビヤ人以外で東亞貿易に参加した者としては支那人、琉球人、日本人、ジャワ人、ブキ人、印度人及びペルシヤ人等がある。就中支那人——といつても主として南支那人であつたらしい——は明朝の下海通蕃禁止政策の行はれてゐたにも拘らず、南洋に進出する者少からず、その一部は印度洋方面に迄驥足を伸ばしてゐた様である。永樂より宣徳年間にかけて行はれた、かの鄭和の大遠征の影響として見ても蓋し當然のことであつたらう。

更に當時の文獻上見逃すことの出来ぬ立役者の一は琉球人である。西洋人の文獻上「レケオス」又は「ゴーレス」として頻繁に現はれてくる者が即ち琉球人であることは、今日史學界の殆ど定説となつたと言つてよからう。事實琉球人が活潑な貿易活動を行つてゐたことに就ては、最近紹介されるに至つた琉球側の史料によつても明に證據立てられてゐる。バスコ・ダ・ガマが初めて印度のカリカットに到達した時の同港の事情を傳へた史料によれば、同港に迄彼等の進出があつたやうである。然し琉球側の史料に於ける琉球人の活動範圍は、日、鮮、支方面は言ふ迄もないとして、南方は大體マラツカ邊までであつたと思はれる。何れにせよ彼等をして斯の如く東亞の貿易史上に名を残さしめた理由は、アラビヤ人の場合と等しく、同國の天恵菲薄なるに歸せしめることが出来る。

當時に於ける日本人の貿易活動は、御朱船貿易の開始以前に屬するので、専ら朝鮮、支那、及び琉球との間に限られてゐたが、室町幕府の勢威漸く衰へ、戰國の世へと推移しつゝあつた時代とて、幕府も諸雄藩も、假に今

日の用語を以てすれば、所謂國防經濟的とも言ふべき必要に迫られて、競つて貿易の利益を追求するやうになつた時であり、従つてその貿易活動は可成活潑な様相を呈してゐた。室町幕府が單なる方便とは言へ、明國に對し朝貢國といふやうな國體没却の態度を敢てしたことに徴しても、貿易に對する當時の積極性を伺ふことが出来るよう。

最後に印度人の海上活動については、R. Mookerji 氏の研究 (A history of Indian Shipping, 1910. 松葉榮重氏譯) 印度海運史、昭和十八年) によつて可成詳細に知ることが出来るが、以上に擧げたやうな諸國人の活動に比し、當時どの程度の地位を占めてゐたかは必ずしも明瞭でない。然し印度のマラバル海岸地方は優良なる船材に富み、造船術も可成發達してゐたようであるから、——例へば Moreland によれば、メッカ巡禮船の如きは勿論木造船で、千噸乃至千五百噸位のものまで造られてゐたといふことである——當時の東亞貿易の人的要素として印度人にも相當の重さを認めねばなるまい。

(二) 東亞貿易の形態

西洋人來航前の東亞貿易の形態を一定の標準によつて體系的に分類説明することには多くの困難が伴ふので、特に分類するといふやうな意味に於てはなしに、唯便宜的な項目を掲げて略説することにする。先づ擧ぐべきは宮廷貿易乃至官營貿易とも名付くべきもので、之が當時の東亞貿易に於ては頗る重要な地位を占めてゐたと考へられる。例へば琉球の貿易は明に王室の獨占貿易であつたし、又我國より明國へ派遣した勸合貿易船は室町幕府の直營若くは、大内、細川等の大名の營む所であつた。又南洋諸國から明國へ派遣した所謂朝貢船の如きも同

様のものであつたと思はれる。但しアラビヤ人や印度人の貿易が如何なる性格のものであつたかは必ずしも明かではない。然し之等にあつても宮廷貿易又はそれに近いものが可成含まれてゐたのではなからうか。蓋し當時の木造船時代に於て遠洋航海に耐へるやうな大船を建造することは、王室や政府の力を以てするのだから容易には望めなかつたであらうし、又當時の王室や政府は主として財政的な見地よりして外國貿易の利益を獨占せんとする傾向があつたこと等によつて之を説明し得るのではなからうか。然し我國にあつても後の御朱印船貿易時代になると商業資本の發達漸く著しく、私營貿易が寧ろ原則となるに至つた。

次に當時の貿易形態として注目すべきものに、支那と東亞諸國との間に行はれた朝貢貿易がある。即ち支那との貿易を欲する東亞諸國が、朝貢の形式を以つてするに非ずんば外國人の渡來を許さなまいといふ支那古來の尊大な態度を逆用して行つた貿易の一形式であり、前述の官營貿易の一種に外ならない。然しながら朝貢船には朝貢使節より明廷へ齎す進貢物並に隨員より支那政府要人に呈する禮物を積み込む外、附搭貨と稱し各種の私貿易品の積載を許し、従つて屢々私商人の便乘をも許したのである。故にそれは形式上官營貿易にして事實私貿易を兼ねたものと云ふべきであらう。否、貿易の見地よりするならば、進貢物や禮物は寧ろ附たりで、附搭貨の對支輸出と、それとの交換による支那品の獲得にこそ朝貢船派遣の主たる目的があつたと云ふべきであらう。

最後に今一つ重要な貿易形態として仲繼貿易を擧げる必要がある。當時の貿易品は後述する如く奢侈品や珍稀な品物、即ち上層階級の消費物が主で、後代の貿易品の如く其の國の産業構造と直接結びついた物は寧ろ少なかつたので、轉々として何處へでも仲繼されやすいと云ふ性質を持つてゐた。加ふるに琉球人の如く専ら仲繼貿易

の利益を得んが爲に活躍した者もあつて、それが一層盛に行はれた次第である。當時の貿易に關する文獻の中には、貿易品の原産地名として往々我々の合點しがたいものを見出す事があるが、それこそ仲繼品であり、原産地名として記されてゐるものは實は仲繼地名に他ならない場合が多い事を注意しなければならぬ。例へば茶道の祖千の利久に關して思出される呂宋壺は明らかに呂宋産にあらずして、實は呂宋仲繼の支那陶器に過ぎなかつた如き其の好例である。

(三) 主要貿易品

當時の貿易品は當時に於ける外國品需要の特質並に交通條件によつて著しく制約された。即ち當時の東亞諸國は何れも中世紀的自足經濟の段階にあり、従つて一般大衆は殆ど外國品需要に入り來らず、之を需要し得る者は國家、王室、又は上層支配階級に限られてゐた。加ふるに當時の船舶輸送能力や航海術の程度よりして、貿易品の帶びなければならぬ特質は容積小にして價值の大なるもの、——その多くは奢侈品乃至珍稀なる品物——でなければならなかつた。かやうな制約はあつたが、當時の史料文獻はかなり多種多様の貿易品が取引された事を傳へてゐる。試みに之に對し稍々體系的な分類を施すならば次の如くなる。

一、貨幣又は地金銀

二、手工業用原料品

(イ) 輕工業用原料 生糸、染料(蘇木、藍等)、皮革、寶石、硫黃等

(ロ) 金屬工業用原料 鐵、銅、錫、鉛等

三、手工業製品

(イ) 奢侈的用品、美術工藝品 各種織物、陶器、漆器等

(ロ) 武器 刀劍類

四、食料品、嗜好品及藥品類 香料、藥種、米穀、砂糖等

五、其他

(イ) 軍用品 馬匹

(ロ) 文化財 書籍、書畫類

右の内主要なるものゝ交流状態につき若干の説明を加へる。先づ貨幣の交流として最も顯著なりしは、明國より日本への永樂錢の輸入であつた。而も當時日本は明國に對し多量の銅を輸出し乍ら彼より銅錢を求めて已まなかつたのであつて、以て當時の日本の銅精鍊並びに鑄貨技術が支那に比し如何に劣つてゐたかを知るに足らう。然し乍らその反面、日本の刀劍製作技術は絶對に他國の追隨を許さざるものがあつたやうで、永樂錢の輸入と引替へに日本より明國へ輸出されたものゝ大宗が實にこの刀劍に外ならなかつたのである。

次に地金銀の交流に於ては之亦日本からの輸出が特に目立つてゐたやうである。日本は琉球を通じての所謂南蠻品の輸入に對し、主として銀を以て決済してゐたと思はれる。

南蠻品と言へば之を代表するものは南洋産の各種香料類であつて、當時東亞諸國間貿易に於て最も重要な地位を占めてゐたのみならず、アラビヤ人の手を経てレバント海沿岸へ、そしてそこから伊太利商人の手により歐洲

各國へ齎らされてゐたことはよく知られてゐる處である。尙所謂南蠻品の中には南洋産の錫や各種藥種、染料類及び印度産の綿布や鐵なども含まれて居り、就中印度の綿布は支那の絹織物と共に廣く東亞各國の間に取引されてゐたやうである。

以上により西洋諸國民來航直前の東亞貿易の概況を明かにし得たと思ふ。乃で次に斯様な情勢下にあつた東亞貿易の中に西洋的要素が加はるに至つた過程、即ち西洋諸國民來航の政治經濟史的意義を闡明するのが順序であるが、本稿の主題からは聊か逸脱する惧れもあるので之を割愛し、直ちに東亞に進出し來つた西洋人による東亞貿易の特質の検討を行ひ、前述の如き東亞人による東亞貿易との異同を明かにして見度いと思ふ。

三 西洋的東亞貿易の特質

西洋諸國民による東亞貿易に就ては、種々なる角度から之を特徴づけることが出来る。先づ第一に指摘し度いと思ふのは彼等の貿易活動の地域的特徴である。即ちそれは東西兩洋間の貿易と東亞諸國間の貿易との二方面から成つてゐたといふ點である。東亞に直接金銀を求め、若しくは西洋に於て古くから珍重され來つた各種の東亞物産を獲得せんとするのが彼等を驅つて東亞進出の冒險を敢てせしむるに至つた最大の動機に違ひないのであるが、事實東亞に來航した彼等は、單にかゝる東西兩洋間の貿易に従事するのみを以て満足せず、同時に殆ど最初から東亞諸國間の貿易にも乗出して來た點を特に注意し度いと思ふ。その理由は色々考へられるが、——例へば商業の放浪性といつたやうなこともその一——最も重要なことは、次に述べんとする今一つの重要な特徴——片

貿易——との關聯から來る貿易資金現地調達の必要性といふことであつた。尙それに加へて現地機關の維持費獲得の必要性をも擧ぐべきであらう。之等の點に就ては便宜次項と一括して説明するが、唯こゝに附言して置いてよいと思ふことは、彼等の貿易活動の本體は飽くまで東西兩洋間のそれであり、東亞諸國間貿易はそれに對する補助的な意味をもつものであつたといふことである。

次に論ずべきは貿易内容、即ち貿易の商品構造に於ける特徴である。而して前述した所により、それは又自ら二方面に分けて考察する必要がある。先づ第一は東西兩洋間の貿易についてであるが、その特徴を一言にして表はせば、それは主として銀と東洋物産との交換であつたといふことが出来る。今日の貿易用語を以てするならば、所謂「片貿易」であつて、然も甚しく西洋に不利なる片貿易であつた。

既に述べた如く、當時の東亞貿易の商品構造には時代的に重要な制約が附せられてゐたが、その事情は西洋人による東西貿易に於ても變りはなかつた。即ち、容積小にして價值の大なるものといふ法則がこゝにも働いてゐた。然も尙西洋の東洋に求むる處は頗る多かつた。その第一は胡椒、生薑、丁香、肉豆蔻、肉桂、白檀等、南洋熱帯の獨占的産物たる香料類であつて、就中胡椒が最も重要視された。それに次いで砂糖、乾葡萄、乾杏等の當時としては奢侈的な食料品や、蘇木、明礬等の染料類、さては印度の各種綿織物や支那の絹織物、陶磁器等の手工業製品に至るまでその種類は頗る多かつた。

然るに同じ法則の支配下に西洋から東洋へ供給して、そこに有利な市場を見出し得る様なものは、金銀、殊に銀を除いては殆ど言ふに足るものはなかつた。金銀以外の礦物類、例へば銅、鐵、鉛等は相當有利な商品ではあ

つたが、輸送上の難點がある外、當時歐洲からの供給力には限りがあつた。事實當時の西洋に於て最も重要な貿易品と云へば毛織物であり、それならば輸出餘力も充分あつたので、それが最も東洋へ賣込み度い品物であつたが、東亞の熱帶圏は云ふも更なり、北方圏の日本、朝鮮、支那等に於てすら習慣の相違と價格の點から到底大なる需要を見出し得なかつた。又美術工藝品等に至つては、日本、支那、印度等の古き文化國を有する東洋の方が當時西洋よりも勝つてゐたと言つても過言ではなく、従つて此種のものについても東洋に好販路を見出す可能性は少かつた。斯くて西洋の東洋に求むる所が大なればなる程、即ち東洋貿易に對し積極的になればなる程、彼等はより多くの銀をば貿易資金として準備しなければならなかつた。その一例として英國東印度會社の初期の頃の事情について見るに、一六〇一年から一六一二年迄の所謂「個別航海時代」に商船隊を派遣すること都合九回、船舶數合計二十六隻で、輸出價額の總計は二十萬磅餘に達したが、その中の約七割に相當する十三萬八千磅餘は貨幣及び地金銀で、其他が商品であつた。それに續く所謂「初期合本」時代は一六一三年より一六年までであるが、其間の派遣船舶數合計二十九隻、輸出價額總計十八萬九千五百磅餘、その中貨幣及地金銀は十一萬一千五百磅で約六割を占めてゐる。(Hunter:—History of British India. Vol. I. による) 斯様な比率は其後も變らなかつたのみか、東印度會社の活動が活潑になればなる程寧ろ地金銀の輸出は増加する傾向があつた。そして斯様な事情は獨り英國人の場合のみならず、大なり小なり他のヨーロッパ人にも共通する所であつた。

然るに當時のヨーロッパは言ふ迄もなく重商主義の時代であり、その重商主義は又別名重金主義と呼ばれた程金銀を重んじ、従つて貿易差額を自國に有利ならしむることにより、少しでも多くの金銀を外國より獲得すること

とを以て國策の第一となし、金銀の流出をば極度に警戒した時代である。乃で東洋貿易は飽く迄行ひ度いが、之が爲に多額の金銀を持出すことには國家も輿論も強く反對するといふ状態であつた。現に英國東印度會社の最初の特許狀には、東洋貿易の資金として會社が持出し得る金銀の限度を年二萬五千磅までと明確に制限を附してゐたのである。茲に當時の彼等の東洋貿易に於ける最大のジレムマが存在した。そしてこのジレムマを巧に解き得る者でなければ東洋貿易の覇者たり得なかつたのである。このジレムマを解く道の一つが新大陸よりの銀の獲得であり、今一つが東亞諸國間貿易であつた。そして事實この兩者が最初から同時に追求されねばならぬ程東西兩洋間の片貿易の開きは大きかつたのである。斯くて西洋諸國民の新大陸に於ける植民貿易活動と東亞に於けるそれとは極めて密接なる關聯に置かれることとなり、新大陸と歐洲と東亞とを結合した世界經濟がこゝに始めて成立し、且發足することゝなつたのである。

次に然らば彼等による東亞諸國間貿易の内容は如何であつたかといふに、今本稿に於て取上げつゝある時期に關する限り、そこには別段取立てゝ云ふ程の特質は見られなかつた。即ちそれは既に明かにしたやうな、西洋人來航前の東亞貿易の商品構造をそのまま踏襲し、精々之を量的に發展せしめたに過ぎなかつた。(註) 換言すれば彼等は先づ東亞に於ける既成の貿易體系の中に入り込み、唯そこに存在した東亞的要素を排除して、その重要なる部分に於て之に取つて替ることに成功したのみであつた。然し乍ら彼等の東亞貿易介入の年月も漸く久しきに及び、又東西兩洋間貿易の發展に伴ひ、東亞諸國間貿易の内容にも次第に變化を生ずるに至るのであるが、本稿に於てはそこ迄は觸れないこととする。

(註) 彼等の東亞諸國間貿易介入の一例を英國東印度會社の行つた一の實例によつて示すと次の様なものがある。即ち同會社は先づ印度に齎した銀によつて印度綿布を買入れ、之を暹羅に輸出して同國特産の良質な皮革と換へ、之を更に日本に舶來して銀に換へると、最初印度綿布に投資した銀の數倍にもなるので、之を以て印度で西洋向の諸商品を買入れる際の資金の不足を大いに補ふことが出来たといふことである。(Moreland:—From Akbar to the death of Aurangzeb. による)

西洋的東亞貿易の第三の特質は之をその貿易方法の上に認めることが出来る。その一は——特に初期の頃に著しかつたことではあるが——彼等の貿易が往々にして海賊行爲と區別し難いものであつたといふことである。それは當時西洋に於て一般的に見られた現象であつて、それが東亞にまで延長されたに過ぎなかつた。左様な海賊的行爲は東亞に進出し來つた西洋諸國民相互の間に行はれたのみならず、又屢々東亞人の商船に對する襲撃となつて現はれた。殊にアラビヤ人、印度人等の回教徒船に對するポルトガル人のそれに於て著しかつた。彼等の回教徒に對する敵愾心は歴史的なものであり、彼等の來航前に東亞貿易の覇者たりしものがアラビヤ人であつた以上、兩者の衝突は寧ろ必然であつたといふべきであらう。この抗争に勝ち抜くことがポルトガル人の東亞貿易制覇の一大前提に外ならなかつたのであり、事實彼等はそれに成功した次第である。

前述の點と表裏の關係に於て認められる西洋的東亞貿易の特質の第二は武裝貿易といふことである。貿易船の乗組員が護身用の身拵へをする程度のことなら、従前の東亞人貿易にも珍しいことではなかつたが、西洋的東亞貿易の武裝は遙にその程度を越えたものであつた。即ち彼等は東亞へ商船を送ると同時に多數の軍艦を送り、従つて東亞の各要地に海軍根據地を設ける外、各地に獲得した商業根據地は出來得る限り之を要塞化して相當の陸兵をも駐屯せしめたのみならず、土民兵をも養成して之を利用するといふやり方であつて、斯様なことは従前の

東亞人貿易には殆どその例を見なかつた處である。

更に注目すべき西洋的貿易方法の特質は、それが組織的な獨占制度の下に行はれたといふ點である。この貿易獨占には對外的、並に對內的の二方面があつた。對外的貿易獨占とは或る特定の地域より外國の商業的勢力を排除し、以てその地域の商權を自國民の爲に確保することを意味し、その獨占の程度は獨占國の政治的、軍事的、乃至經濟的の實力によつて決定される。従つて獨占の効果は相對的なるを免がれぬ。之に反し對內的貿易獨占とは、一般的に、又は特定地域につきその貿易を國王や政府が獨占し、若くは自國民中の特定の個人又は團體に獨占せしむることを意味し、従つて自國民に關する限り、且又國家權力が確立してゐる限り、その効果は絕對的といふことが出来る。ポルトガル人が約一世紀の長きに亘り東亞貿易の覇權を握り、又其後和蘭人が之に代り、特に東印度方面の貿易に於て格別の優位を確保した如きは、對外的獨占の顯著なる實例であり、ポルトガルや西班牙の東亞貿易が専ら王室又は政府の經營として行はれ、英國や和蘭が夫々東印度會社なる獨占機關を設け、該會社以外の自國民が東洋に進出することを禁止した如きは對內的獨占の好例である。而して右の如き對外的獨占と對內的獨占との間には相互に密接なる關係があり、殊に對內的獨占制度の確立によつて對外的獨占も——縱し一時的なりとも——可能となつたといふのが重商主義時代に於ける西洋的東亞貿易の實相であつた。

(註) 西人來航前の東亞諸國による東亞貿易に於ても、既述の如く王室又は政府(封建的地方政府をも含めて)による貿易が弘く行はれてゐたが、之を以て西洋的東亞貿易に於ける對內的獨占制度と同一視することは必ずしも當を得ないと思ふ。後者のそれには多分に近代的な性格を認め得るに反し、前者に之を認むることは頗る困難であると思ふ。

扱て西洋的東亞貿易に於ける獨占制の理由につき簡単に私見を述べるならば、先づ經濟的理由として次の諸點を擧げることが出来ると思ふ。即ち當時西洋より遙々東亞へ商船隊を派遣するといふことは、自然的にも社會的にも將又經濟的にも一大冒險であり、之が遂行には莫大なる獨占利潤の誘引が必要であつた。又當時の貿易品としては既述の如く量少くして價值の大なるものたることを必要としたが、自然的に供給の著しく制限されてゐる物ならば兎も角、然らざる場合には、之が供給を適當に制御し得る爲の強力な獨占權を確保することが必要であつた。又初期の東亞貿易は半ば探險事業であり、従つて發明發見を保護助長すべき制度として夙に發達し來つた特許權制度の精神が此種探險事業にまで擴張されたことは極めて自然であつた。のみならず當時の歐洲經濟社會には中世以來のギルド制度との關聯に於て、凡ゆる方面に獨占制度が普及してゐた(註)ことを思へば、英、蘭等の東印度貿易が一種のギルド的獨占制度として出發したことも亦敢て不思議ではなかつたと言はねばならぬ。

(註) 當時のこの獨占制は産業團體の保護といふよりは、寧ろ獨占權に對する特許料の徵收といふ、政府又は王室の財政的政策、換言すれば課税制度の一種であつたと見る方が真相に近いように思ふ。

次に獨占制の政治的理由としては次の諸點が擧げられると思ふ。即ち當時の重商主義國家にとつて東亞貿易は重要な國策事業であつたのであるから、西、葡兩國の場合の如く、國家又は王室が之を直營するに非ずんば、英、蘭等の場合の如く、國家の絶大なる保護の下に民間團體をして之を擔當せしむることとなつたのは至極當然と言ふべく、その保護の形式の一が獨占權の附與に外ならなかつたと解し得る。英國史家の多くは、英國東印度會社と和蘭のそれとを比較して、後者が國家の厚き保護の下にスタートしたのに對し、前者は何等斯様な保護を

受くることなく、専らロンドン商人の自主的事業として發足した所に顯著なる差異ありとなし、且當初英國東印度會社が和蘭東印度會社との競争に於て壓倒された主たる理由も亦茲にありと論ずる者が多いが、獨占權を與へられたことそれ自身が國家の大なる保護なりと解する見地よりすれば、それは全くの謬見に非ずとするも、少くとも甚しき誇張の言と言はねばならぬと思ふ。更に東印度會社に對しては、英、蘭何れの場合にあつても、東亞の現地に於ける一部國家主權の代行——例へば非基督教國に對する宣戰媾和の權、鑄貨權、司法權等——を委任して居り、當時の交通状態よりして己むを得なかつたことと思はれるが、斯様な重大な處置を講ずる爲からしても、東亞貿易を一個の巨大な獨占機關に委ねる必要があつたと解し得ると思ふ。更に重商主義國家の當然の性格よりして、東亞貿易に於ける對外的獨占を意圖するに至つたが、之が爲には自國商船隊の結合統一により強力な獨占團體として活躍せしむるに如かず、この見地よりするも獨占制が必至であつたと考へられる。事實和蘭東印度會社は、英國東印度會社の創立に刺戟され、それまでに存在してゐた多數の遠東貿易會社を統合して創設されたものである。

最後に植民政策の見地より見たる西洋的東亞貿易の特徴につき一言しておき度い。この見地よりする時、彼等の東亞に於ける活動には三種の型が認められる。その一は商業根據地的發展であつて、商業上の要地に根據地を設け、之を足場として専ら貿易活動をなす以外、何等領土支配的な意圖を有せざるものである。東亞に於て之に終始したものはポルトガルであつた。之に反し第二の型は領土的發展であつて、最初から相當大なる領土を獲得し、從つてそこに相當數の本國人を送つて植民地行政を施しつゝ、他面この植民地を中心として弘く東亞貿易に

従事したものでつて、比律賓を領有したスペインが正に之に該當する。然るに第三の型は前二者を發展的に綜合したものであつて、最初相當期間は専ら商業根據地的發展をなすつたものが、聽て時至つて領土的發展へと推移して行つたものである。和蘭、英國等がその好例である。同じく等を並べて東亞へ進出した西洋諸國民の活動方法の間に、斯様な顯著な差異を生じた理由を檢討し、之に歴史的批判を加へることは興味あることであるが、紙幅の關係上茲には之を省略することとする。

尙植民政策の見地よりして重要視すべきは、彼等の貿易活動には多少強弱の差こそあれ、殆ど必ず東亞社會に對する宗教的活動が伴つて居り、且兩者の間には緊密な關係があつたといふ點である。そしてその點に於て最も積極的なりしは言ふ迄も無く西班牙であつて、遂に比律賓島民の殆ど全部を基督教徒化してしまつた業績は一應律なりとせねばならぬ。然し乍らこの種の事例は彼等の來航以前の東亞貿易に於ても之を見ることが出来る。即ちアラビヤ商人の來航する所必ず回教の弘布を伴ひ、殊に東印度數千萬の住民は十四世紀頃より十五世紀にかけて極めて平和裡に回教徒化してしまつたのである。但しこの回教の弘布は基督教のそれと異り、本國よりする所の植民政策的な意味を含むものではなかつたことに注意せねばならぬ。

四 西洋的東亞貿易が東亞の政治經濟に及ぼせる影響

以上により近世初期、即ち重商主義時代に於ける西洋的東亞貿易の特質は略々之を明かにし得たと思ふ。然らば斯様な特質を有する西洋的東亞貿易は、それより以前東亞人の手によつて發展せしめられつた東亞貿易、其他東亞の一般政治經濟の上に如何なる影響を齎すに至つたであらうか。以下この點について概説しやうと

思ふ。

先づ東亞貿易に及ぼせる影響の中、東亞諸國間貿易について見るに、既述の如く西洋諸國民は單に従前の東亞貿易の體系の中に入り込み、大體に於て之を踏襲したに過ぎなかつたのであるから、貿易内容の上には質的に大した影響を齎らさなかつたと考へられる。然し乍ら彼等の貿易活動は、東亞人のそれに比し遙に積極的なものがあつたから、量的には東亞諸國間貿易を著しく増大せしむる結果となつた。殊に各主要港に於ける仲繼貿易を發展せしむる上に寄與する所頗る大なるものがあつたと思ふ。それがよい刺戟となつて一部の東亞人、例へば日本商人等をして新に續々と東亞貿易に進出せしむるに至つたが、(御朱船貿易の隆盛時代を想起せよ)その反面アラビヤ商人其他従來東亞貿易に活躍し來つた東亞人を次第に排除し、日本、支那等が諸種の理由の爲に自國民の貿易活動を抑制するに至つたのと相俟つて、遂には東亞貿易の覇權を彼等の掌中に收めてしまつた。それを可能ならしめた原因は、前述の如く東亞諸國の消極的な態度にも存するが、既述の如く彼等の東亞貿易が所謂武裝貿易であり、重商主義國家の大なる保護と巨額の資本力とを背景として、極めて組織的な方法を以て行はれた點に存することも亦明かであらう。

次に東西兩洋間の貿易は彼等の積極的な活動によつて、質的にも量的にも飛躍的發展が齎らされた。殊に東印度の香料類は言はずもがな、印度の綿布、硝石、藍、支那の茶、絹織物、陶磁器等は、従來の標準を以てするならば、正に「大量」輸出と呼ばれるべき状態にまで持來された。就中、印度硝石は西洋人の手により始めて歐洲に輸出されたものであり、又印度綿布や支那茶は主として英國東印度會社により歐洲市場の開拓が行はれたのである。

斯の如く東亞貿易は西洋人の來航によつて一大飛躍を遂げるに至つたが、同時に貿易面を通じて東亞の一般産

業經濟に徐々に、然し乍ら至大の影響を及ぼすに至つたことは當然である。就中最も顯著なりし現象は、西洋又は米大陸より東亞への金銀、殊に銀の大量流入であつた。それは既述の如き西洋的東亞貿易の片貿易的特質に基づいてゐたこと言ふ迄もない。之が東亞諸國に於ける貨幣經濟の發達を著しく促進したであらうといふことは容易に考へ得る所である。例へば明代は固より清朝初期の支那の租税は未だ物納が多かつたが、清朝も中期以後になると、江、浙二省の漕米を徐いては殆ど金納に變つてしまつたといふやうな所に貨幣經濟化の推移が伺へると思ふ。のみならず支那通貨の銀本位化は主として明、清代に於ける外國銀の流入に基づいてゐるのである。(註)

(註) この點我國の場合は多少事情を異にしてゐるようである。即ち我國にあつては中世末期以來國內の産金産銀が盛になつたので、南蠻貿易の隆昌と共に寧ろ金銀の出超を見たが、反對に銅鐵の缺乏に憊んだので之は主として支那や朝鮮からの輸入に仰ぎ、従つて専ら銅鐵を得んが爲め對支、對朝鮮貿易が發展した。

然し乍ら他の反面より見るならば、西洋よりの銀流入による東亞諸國の貨幣經濟化は、主として貿易港市及び其の附近を含む局地的な現象に止まり、一般的には銀流入の割合に貨幣經濟化は容易に進まなかつた。そしてその主たる原因は、流入銀の少からざる部分が種々なる形に於て退藏され、必ずしも容易に貨幣化されなかつた所に存するといふことも出来るのではないかと思ふ。前述の點と照合して結局どう結論すべきかは、今少し精密な史的研究を俟つて明かにせらるべきであらう。

兎も角西洋的東亞貿易の發展により、東亞諸國の貨幣經濟化を促進した一面があつた以上、その限りに於てそれは又東亞の封建的、靜的社會の基礎構造を次第に *undermine* し、遂には之が崩壞に導くと共に、曠ては植民地化へと進展する契機をなしたといふことが出来る。殊に西洋的商業資本の積極的侵入を容易く許した地域に於

てこの過程は一層表面的な事實となつて現はれた。その最もよい實例は、之を英國東印度會社と印度の經濟社會との關係に於て見出すことが出来るが、それに就ては嘗て稍々詳細な研究を發表したことがあるので茲に繰返すことは之を省略する。(拙著、南洋及印度經濟研究、昭和十七年、參照)然し當時の東亞諸國の中には、我國や支那の如く民族的抵抗力大にして容易に西洋商業資本の侵入を許さず、彼等の貿易活動が積極化すればする程、之に對應すべく適當なる制度を設け、東亞貿易に於ける自主性を飽くまで保持し得たものもあつた。(我國の長崎や支那の廣東に於ける貿易制度を見よ)その反對に比律賓の如き、西班牙人來航當時未だ何等の國家組織を持たなかつた爲に、最初から容易に植民地化せられてしまつたのは是非もないことであつた。

最後に西洋的東亞貿易が東亞諸國の一般産業に如何なる影響を及ぼしたかを見るに、既述の如く東亞諸國間並に東西兩洋間の貿易を飛躍的に發展せしむるに至つた以上、それ丈東亞諸國の輸出品生産を増進せしめ、一般經濟の發展にも寄與する所があつたであらうことは疑ひのない所である。然し乍ら西洋的商業資本の容易に侵入し得た地方、例へば印度の如きにあつては、西洋向輸出品生産の發達に伴ひ、在來産業や傳統的技術の漸次的衰退を招くに至つた場合もある。(この點に就ても亦前掲拙著參照)

之を要するに近世初期に於ける西洋的東亞貿易が、東亞の政治、經濟、社會に及ぼした影響は頗る複雑にして且深遠なるものがあつたが、更に世界史的見地よりして最も重大視せねばならぬ點は、既述の如く之によつて新大陸と歐洲と東亞との經濟が始めて緊密なる關係に齎らされ、斯くして近世世界經濟の基礎は出來上り、中世紀的、停滯的なりし東亞經濟も世界經濟の一環として漸次近代化の道を辿らざるを得ない運命に置かるゝに至つたといふことである。(終)

——二六〇四年五月初稿、十一月改稿——